

清水建設や北海道大学などはロシアの研究機関と共同で、次世代のエネルギー資源として期待されるメタンハイドレートを水底から連続回収する実験に世界で初めて成功した。米国や中国など世界各国が商業生産に向けて技術開発を競っている。日本も二〇一八年ごろの商業化を目指しており、清水建設は四年以内

400メートル水底から連続回収に成功

次世代資源「メタンハイドレート」

をめぐり今回の採掘技術 豊富にあり、商業化には 採用技術の開発が鍵を握る。

メタンハイドレート

は、メタンガスが高圧・低温の海底下や凍土の下にシャーベット状に固まったもの。日本近海だけでも国内で年間に消費する天然ガスの九十年分が存在するとされる。水深一千―千五百メートルの海底に二メートルの筒形の回収装置

清水建設・北大など

を、調査船から水深四百メートルまで降ろし、メタンハイドレートのある湖底にかぶせた。独自の粉碎技術で百分当たり約一・四立方メートルのメタンガスの連続回収に成功した。

メタンハイドレートは加熱や減圧をしないと回収は難しいとされてきた。今回の技術は利用範囲が海底の浅いところに限られるが、こうした処理が不要で、低コスト化につながる。

政府は二〇〇七年に施行された海洋基本法に基づき、〇八年に日本近海の資源採掘などを柱とする海洋基本計画を策定した。今後約十年でメタンハイドレートの商業生産を開始を目指しており、新たに国家プロジェクトを始動、清水建設も参加している。